

2011年5月10日開催 第558回 番組審議会

■ 出席委員

荒巻裕委員長 櫻井美幸副委員長 上田理恵子委員 神谷徹委員
齊藤善也委員 佐藤卓己委員 佐藤友美子委員 東野博昭委員

■ 毎日放送出席者

田中専務 上田専務 松島常務 河村編成局長 梅本報道局長 寺西制作局長
熊ラジオ局長 立野コンプライアンス室長 沢田担当プロデューサー

◆ 報道特別番組「そのとき、人々は～平成三陸大津波の証言」について審議した。

各委員の主な意見は次の通り。

- * 南三陸はMBSの「持ち場」という気持ちを末永く継続して、フォローしていくことが、この現場に入った報道機関としての責任というか、仕事だという気がした。
- * 「海によって育まれたまちや文化とともに今後も生きる」というのは、1つのメッセージではあるが、それがどういう生活に結びつくのか、あまり思い描くことができない。番組を見ながらそう考えたというのは、この番組のある種の教訓であり、教材として優れているところ。
- * 印象深かったのは、インタビューに答える人たちの言葉のリアルさ。ただ言葉だけが淡々と並んで、まとめられてしまうところが、名前が出ていることで、知らず知らずのうちに、個人の言葉に力が加わった。
- * 今後の展望が持てる状態ではなかったし、今もないが、最後に被災者の言葉や子どもたちの笑顔から、プラスの方向に気持ちが感じられ、悲観的にならずに済んだ。
- * 「被害時の証言は早い時期に集めないと取材が困難になる」とあるが、今回の映像を見て、本当にそうだと感じた。早い時期に取材したことの意味をすごく感じ取れる番組だった。
- * かなり詰め込みすぎてしまったのではないかと。番組で何が言いたかったかが逆に見えなくなってしまった。1つ1つのテーマを深掘りしていくほうがよかったのではないかと。
- * 伝えるべきことはたくさんあるので、どれだけ整理して取り出すかは非常に難しい選択だったと思う。被害者や遺族の話を入れると情緒的になってしまうが、この番組に関して、過剰に情緒的にならずに、バランスもとれていたのではないかなと思う。
- * 巨大な津波で、人も故郷も根こそぎ奪われて失ってしまったにもかかわらず人は、どんなに過酷な状況に直面しても、なお他者に対する思いやりとか希望を持って生きていける存在であることが描かれていると感じた。

◆ 東北地方のラジオ放送が「radiko」の支援サイトを使い、全国配信されることについて、

ラジオ局長が報告した。

以上